

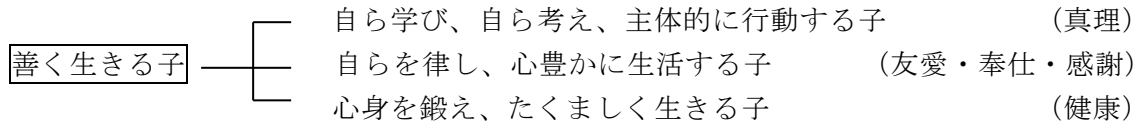
令和元年度 学校評価 自己評価書

あま市立甚目寺小学校

1 総括

(1) 教育目標（学校経営案より）

「善く生きる子」の育成を目標とし、知・徳・体の調和のとれた人間形成を図るとともに、公共の精神を尊び、活力に満ちた心身ともに健やかな児童の育成を図る。



(2) 本年度の重点努力目標

ア 「自ら学び、自ら考え、主体的に行動する子」の育成に向けて

- ・ 「学び」が児童の主体的な意欲から湧き起こるよう、単元構成や指導方法の工夫に努めるとともに、体験的な学習や問題解決的な学習を取り入れた授業づくりに努める。
- ・ 学習における意欲を持続させる手だての工夫に努め、自分の考えをまとめ、分かり易く表現する学習活動を重視し、習得し活用するという一連の学習活動の充実に努める。

イ 「自らを律し、心豊かに生活する子」の育成に向けて

- ・ ESDの視点に立った「かかわる」「つたえる」「つながる」活動を通して、コミュニケーション能力と自他の人権を尊重する意識を向上させ、友愛の心、奉仕する心、感謝する心を育む活動の実践に努める。
- ・ 各教科とESD等諸活動との連携を図り、コミュニティ・スクールとして、家庭や地域と連携を図りながら、体験活動等を生かした心に響く教育の推進に努める

ウ 「心身を鍛え、たくましく生きる子」の育成に向けて

- ・ 望ましい生活習慣が、健康で安全な生活を送る基礎になることを理解し、心身の健康を適切に管理する資質や能力を身につけることができる教育活動の工夫に努める。
- ・ 児童にかかわる様々な緊急時の事象を想定し、適切に対処し危険を回避する能力・態度・習慣の育成に努める。

エ 教職員の多忙化解消にかかる業務改善

- ・ 教職員のタイムマネジメントへの意識を高め、行事・諸活動の精選と諸会議の効率化、校内データの有効活用を図る。
- ・ 風通しのよい職場、個性を生かし、補い合い、助け合える職場づくりに努める。

2 自己評価の実施体制

(1) 調査時期 令和2年1月

(2) 調査項目 別紙調査用紙参照

(3) 調査対象 児童(4～6年) 314名 保護者(PTA役員) 40名 教職員 32名

3 調査結果 別紙 学校評価集計結果、本校の教育活動の総合評価、

4 考察

- (1) 昨年度と比較をするとほとんどの項目で、評価が高まりました。特に評価が高まった項目は「ESDについて」「あいさつ」「安心して過ごせる環境」「学校内外で被災した場合の対応」などであった。

- (2) 0.2 ポイント以上評価が下がった項目は、児童・保護者・教職員共に1項目もない。
0.1 ポイント下がった項目は「楽しい学校生活」(教職員)、「家庭への連絡や情報提供」(保護者)「運動会の持ち方」(保護者)(教職員)「いじめなどのない楽しい学級」(教職員)であった。
- (3) 全体的に教科指導項目の児童評価の数値が他と比べると低い。「主体的な学習」「思いや考えを意欲的に伝え合う学習」の項目のみ評価3を下回った。
- (4) 今年度改善が見られましたが、他と比べ数値が低い項目として、「E S Dについて」(教職員)「言葉遣い」(保護者)「学校内外で被災した場合の対応」(保護者)であった。

5 成果と課題

<成果>

- (1) 今年度は、「当たり前のことを当たり前に」行うことで落ち着きのある学校生活となるよう、あいさつ、朝学習での私語の禁止や廊下を静かに歩くといった基本的な生活習慣の定着に努め、高評価を得た。今後も継続していきたい。
- (2) 今年度から、保護者との個人懇談前に担任と児童との教育相談活動を実施した。いじめの早期発見・早期対応や児童と担任との相談しやすい関係づくりに役立った。
- (3) E S Dへの取り組み等、これまでの蓄積で総合学習発表会をはじめ充実した活動を行うことができた。
- (4) コミュニティ・スクールに移行し、学校支援団体の横の連携が図られるようになった。

<課題>

- (1) 新学習指導要領への移行期間として授業の見直し、改善を図ってきたが、まだ手さぐりの状況である。さらに研修を深め、児童が主役となる「主体的で対話的な深い学び」を実現できる授業づくりをしていく必要がある。
- (2) 学校の日頃の様子を情報公開するため、HPの更新をほぼ毎日行ってきたが、十分保護者への理解が進んでいなかった。さまざまな場で宣伝していきたい。
- (3) 行事の見直しの一環として、次年度より運動会を春開催にした。練習時間が限られる中どのような内容に見直していくか検討が必要である。
- (4) 修学旅行・林間学校が9月・10月に移行した。充実した行事となるようねらいを明確にして取り組んでいく必要がある。
- (5) 働き方改革が叫ばれ、行事の見直しが行われる中、おやじの会や学校支援のボランティアとの連携・協力を深めることで安全・安心な「児童が楽しい」と感じられるような学校にしたい。
- (6) 今年度は職員の異動が多く、E S Dに対する理解が不十分なままのスタートであった。年度当初に職員・児童・保護者の共通理解を図っていきたい。

6 改善策

- (1) 新学習指導要領実施に伴う授業時数の確保に向けて、E S Dカレンダーを見直し、生活科及び総合的な学習の時間の年間指導計画の焦点化を図り、特別の教科道徳を含む教科および特別活動との関連を重視しながら、調和の取れたカリキュラムの開発を目指す。
- (2) 各学年で、単元ごとの「学びのプラン」を作成し、単元を見通した学習計画を作成する。その中で児童主体の授業づくりに取り組むと同時に指導と評価の一体化をめざす。
- (3) 授業研究や優れた外部講師の指導により教職員の指導力向上を図る。
- (4) 教育活動の焦点化と精選を図り、職員の働き方改革につなげる。
- (5) E S Dの取り組みがマンネリ化しないよう、総合学習発表会の持ち方を見直したり、卒業論文集の発行をしたりするなど改善と充実を図っていく。